

第457回千葉医学会例会 第一外科教室談話会

期日：昭和42年11月23日(木) 午前9時30分
会場：千葉大学医学部附属病院第2講堂

1. セミノームの一例

増田 裕

(抄録未着)

2. 最近経験した悪性黒色腫2例について

○天野勝弘, 山崎 武, 海保敬一
内田威郎, 鈴木政実

教室で最近経験した悪性黒色腫2例と、その文献的考察について報告する。症例はともに成年男子で、発生部位も下肢、鼠蹊淋巴節転移の試験切除により本症と診断した。第1例は左下腿の黒色斑がしだいに増大潰瘍化し、左鼠蹊淋巴節腫大にて入院。術前放射線治療施行後、制癌剤の局所環流療法のもとに転移淋巴節摘出術を行なったが、術後3カ月で全身転移のため死亡。第2例は右足背部の外傷後、同部に黒色肉芽腫が増生し、右鼠蹊淋巴節腫大にて入院。右下肢の局所環流のもとに鼠蹊淋巴節摘出術を行ない、一週間後に原発巣の根治的切除術を施行し、術後6カ月の現在なを再発転移の徴をみない。本疾患は本邦では比較的まれだが、欧米では多くの報告がみられ、治療法としては従来の放射線と切除術に代わって、制癌剤(3ルキル化剤)による局所環流と切除術との併用が最も良いとされている。遠隔転移を起こし易い本症の特徴について考察を行ない、新治療法の経験を報告した。

3. 葉状嚢胞肉腫の1例

○小林伸行, 村上 和, 木家豊美
上川名誠一, 松本三郎

症例は16才未婚女性、主訴：左乳房腫瘍、現病歴：昭和41年8月左乳房に疼痛を覚え同時に鶏卵大の腫瘍に気づく。腫瘍は境界鮮明、表面平滑、皮膚および基底との癒着なし。腫瘍はその後急速に増大した。腋窩淋巴腺、鎖骨上淋巴腺腫脹なし、以上の所見より葉状嚢胞肉腫の診断で左乳房切断術および左腋窩淋巴腺廓清術を行ない、術後10日目に全治退院した。摘出標本は、手拳大で明瞭な被膜をもち、断面は塊状で顕微鏡的には線維

腺腫の1型であり、細胞の異型性はなかった。葉状嚢胞肉腫は臨床的には形が大きく、被嚢があり、弾性硬または嚢腫様で周囲と境されており、組織学的には線維腺腫の管内型の1型と思われ、間質線維成分の増殖が著しく、まれに細胞の異型性も認められる。葉状嚢胞肉腫は乳腺腫瘍の約1~3%を占め、本邦では30才代の女性に多い。治療は一般に良性と解されているので、単純乳房切断術あるいは腫瘍摘出術が行なわれているが、良性か悪性かの診断に対しては、組織の連続切片の検索が必要と思われる。

4. 背部筋肉腫の1例

○福田 淳, 中西文磨, 桑原 久
桐原重徳, 磯部宏志

最近当教室において背部に発生した平滑筋肉腫の一例を経験したので報告する。症例は20才女性、主訴、左背部腫瘍。現病歴、昭和42年2月左背部にクルミ大の腫瘍が生じ某病院にて肋膜周囲膿瘍と診断、剔出術を受けた。4月同部に腫瘍再発し当科へ入院。局所々見は暗赤色、弾性軟、小児手拳大で自発痛・圧痛なし。入院後患部に放射線計11,000R照射、5Fu計7,500mgを手術時まで使用した。腫瘍は第VIII, IX肋骨を破壊し肋膜をこえ左肺下葉と癒着していた。組織所見では著しく紡錘形の細胞に富みエオジンで淡染、核分裂像が多数あり横紋はみられない。以上より背部皮下軟部組織より発生した平滑筋肉腫と診断した。術後の経過は良好で7週間後に退院したが4カ月後同部に腫瘍が再発し第I, II腰椎に転移をきたし両下肢麻痺を起こしている。

皮下より発生せる平滑筋肉腫はきわめてまれであり、皮下血管の筋組織より発生し若年者に多いとされている。過去5年間の皮膚腫瘍に関する統計によれば間葉性腫瘍は全皮膚疾患の0.66%であり、平滑筋肉腫は一例も報告されていない。